

それから、臨也と逢えば夜には身体を重ねるのが当然となった。一度既成事実があればあとは何度でも同じだ。未だに、彼は飽きたと言ひ出さない。そろそろ、彼と恋人ごっこを初めて三週間目に入ろうとしている。

当初は一ヶ月も持つはずがないと思っていたが、予想より長い。それが幸か不幸かは、今の帝人にはわからない。死刑宣告を待つ囚人の気分だ。幸福と同時に、いつでも終わりの時を思ってしまう。

臨也は相変わらず優しい。とても、優しい。ただし夜は妙に荒々しい時もあるが、それもまるで求められているようで悪くなかったし、基本は優しい。それが嘘だと理解していても、慈愛すら見受けられる表情で見つめられると、もしかして本気なのではないか、と思いたくなる自分がいる。

(そんなこと、あるはずないのに)

わかつているのに、夢見たくなる。わかつていても、そんな風に思えてしまうほどに臨也は演技が巧みだ。知っていても帝人は恋に落ちたわけで、知らなければ彼に恋するのは道理とすら思えた。

何度も身体を重ねて、そのたびに終焉の日を意識するから、そろそろ覚悟もしつかりできつつあるような気がする。これはたぶん、自分にとつては良いことだ。覚悟はできないよりもできた方がよい。

そんなことを考え、苦笑を浮かべる。最近苦笑が我ながら増えた。

相変わらず、池袋の街は人が多い。学校帰り、ゆつくりと歩きながら今夜は臨也がアパートに来る予定になっているから、夕食の材料を買って帰ろう、と考える。

(あと、うちアパートじゃ壁が薄いからちゃんと断らないと)

この間はそれで声を殺すのに必死だった。駄目だと言ったのに、臨也がその気になると止める術がない。

(臨也さんのマンションは防音がしっかりしてるから、まだ良いけど)

あの安アパートでは隣室の生活音もほぼ丸聞こえだ。けれど、当然ながら喘ぎ声なんて聞かれたくない。みつともないし恥ずかしいしいたたまれない。

それなのに、堪えようとする臨也はますます帝人に声を上げさせようとする。本当に酷い男だ。それでも臨也が好きな自分の趣味は最低最悪だ。

できればせめてホテルが良いとあらかじめねだれば領いてくれるだろうか。きつとその場合、する気満々なんだね、そんなに俺としたいの、と彼はからかってくるだろうけれど、この際それは我慢する。それも事実には違いない。夜に逢えば彼は必ず自分に手を伸ばす。自分は拒めない。と言うより、それを求めている側面も、確かにある。

好きな相手と身体をつなぎたいと思うのは、本能なのだろうか。